

令和 6 年 6 月 20 日現在

機関番号：15301

研究種目：研究活動スタート支援

研究期間：2020～2023

課題番号：20K21971

研究課題名（和文）盲僧琵琶の語り物と宗教儀礼 - その歴史・実態・役割

研究課題名（英文）Tales and Rites in the Blind Biwa Tradition: History, Reality, and Function

研究代表者

KHALMIRZAEVA SAIDA (KHALMIRZAEVA, Saida)

岡山大学・グローバル人材育成院・准教授

研究者番号：50880457

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,200,000円

研究成果の概要（和文）：本研究の目的は、兵藤裕己が九州地方の座頭から蒐集・記録した200本以上に及ぶ音声・映像資料を対象として、詞章・旋律構成の分析ならびに現存する語り物テキストとの比較により、第一に、九州地方の座頭による語り物の生成・変容の仕組みを明らかにすること、第二に、九州地方の座頭による語り物文芸の特徴と、素材・形式・音楽構造の共通性という観点から繋がりを持つ、日本のその他の語り物ジャンルとの関係を解明すること、そして、第三に、九州地方の座頭による語り物文芸の日本民俗文化史および日本芸能史における位置付けを明確にすることであった。

研究成果の学術的意義や社会的意義

口誦形式理論は、世界の多くの研究者によって適用されてきた一方、同時に補強・再検討も加えられたが、未だ十分に理解されていないところも多々ある。

こうした現状を承けて、KHALMIRZAEVAは、座頭による語り物文芸を口頭文化の一事例として、フォーミュラの習得・生成と、語り物の生成・継承・伝播の仕組み、及び語り物文芸の書記性と口頭性等、語り物文芸の本質に関わる諸問題の解明を目指した。本研究は、日本における語り物ジャンルの実態・形成・歴史的展開を明確にするだけでなく、他地域の語り物研究に適用可能な法則・事例を提供し、口誦形式理論を補完・補正することで、国際口承文芸研究に貢献するものとなった。

研究成果の概要（英文）：Reports and research papers on the blind biwa players' tradition of Kyushu by Kimura Riro, Narita Mamoru, Hyodo Hiromi, Hugh de Ferranti, and others are valuable sources when it comes to the history and repertory of the tradition. However, in previous research, there has not been sufficient consideration of the mechanisms of text recomposition and the relationship between the blind biwa players' narratives and other narrative genres.

The purpose of this research is 1) to clarify the mechanism by which the stories in the blind biwa players' tradition are created and transformed, 2) to identify the characteristics of blind biwa players' tradition of the Kyushu region and its relationship with other storytelling genres connected in terms of narrative material, form, and musical structure, and 3) to identify the place and role of the blind biwa players' tradition in the history of Japanese folk culture and performing arts' history.

研究分野：日本文学・民俗学

キーワード：座頭 語り物 口誦形式理論 フォーミュラ 口承文芸 宗教儀礼 書記性 口頭性

1. 研究開始当初の背景

これまで語り物文芸の研究分野では、木村理郎、成田守、何真知子、兵藤裕己、Hugh de Ferranti 等による調査報告書や研究論文が発表され、これらは九州地方における座頭の歴史、宗教・芸能活動、及び演目について知る上で貴重な資料となっている。そのうち兵藤裕己や Hugh de Ferranti は、国際的な口承文芸研究への貢献にも繋がる、重要な業績を残している。兵藤裕己や Hugh de Ferranti は、現地調査を行うことにより、座頭に関する豊富なデータや口頭伝承を蒐集し、口誦形式理論(Oral-formulaic Theory)を適用・実践的に補完しつつ、語り物の演唱方法、口承文芸と書承文芸との関係について研究してきた。両者の研究成果は、『平家物語』を始め、日本古典の語り物文芸の形成・歴史的展開の理解に大きな役割を果たすものとなった。だが、座頭の語り物文芸の実態については、詞章の生成・変容の仕組み、座頭による語り物とその他の語り物ジャンルとの関係等が、従来の研究では十分に解明されていなかった問題・課題や、これまでの研究で具体例をもって実証されていない仮説があった。

こうした問題・課題を認識した KHALMIRZAEVA Saida は、兵藤裕己や Hugh de Ferranti の研究を引き継ぎ、博士課程では座頭による語り物文芸の研究に取り組んだ。その後、さらに研究を深め、2019年4月より1年間、外国人特別研究員として兵藤裕己と共に語り物文芸の生成と伝播の仕組み、座頭による語り物文芸の特徴とその他の語り物ジャンルとの関係、語り物文芸の書記性(Literacy)と口頭性(Orality)等の問題を中心とした共同研究を実施した。だが、KHALMIRZAEVA の就職のため、外国人特別研究員として取り組んだ研究の成果は、座頭のレパートリーにおける宗教テキストや平家物の実態を考察することに留まっていった。そのため、外国人特別研究員としての研究期間終了後も、兵藤裕己と共に開始した研究を引き続き行った。

2. 研究の目的

九州地方の座頭による語り物文芸は、中世の語り物の最も原初的な姿を伝えていているとして、1960年代頃から民俗学者や国文学者の注目を集め、当時少数ながら、未だ活動していた座頭を対象とした取材・研究調査が始まった。木村理郎、成田守、兵藤裕己、Hugh de Ferranti 等による報告書や研究論文が発表され、これらは九州地方における座頭の歴史や演目について知る上で貴重な資料となった。だが、従来の研究においては、詞章の再構築の仕組み、座頭による語り物とその他の語り物ジャンルとの関係の検討は十分ではなく、実態は解明されていなかった。

本研究の目的は、兵藤裕己が九州地方の座頭から蒐集・記録した200本以上に及ぶ音声・映像資料を対象として、詞章・旋律構成の分析ならびに現存する語り物テキストとの比較により、第一に、座頭による語り物の生成・変容の仕組みを明らかにすること、第二に、九州地方の座頭による語り物文芸の特徴と、素材・形式・音楽構造の共通性という観点から繋がりを持つ、その他の語り物ジャンルとの関係を解明すること、第三に、日本の民俗文化史と芸能史における位置付けを明確にすることであった。

3. 研究の方法

20世紀前半に Milman Parry と Albert Lord によって提唱された口誦形式理論(Oral-formulaic Theory)は、伝承文学研究に多大な影響を及ぼし、現在でも重要な理論の一つとなっている。この口誦形式理論とは、次のような理論である。すなわち、語り物(口承の物語・叙事詩)には、特定の単語の結合によって形成された決まり文句や定型文が多い。これらはリズムカルパターンに沿ったもので、「フォーミュラ」(Formula)と呼ばれる。語り手は、多様なストーリーやその中の個々の場面に応じて、要所に既成のフォーミュラをそのまま使用し、長編の語り物を即興的に口頭で生成していくのである。口誦形式理論は、John Miles Foley、Karl Reichl、Walter Feldman、Andrew J. Bannister、兵藤裕己、Hugh de Ferranti 等、世界の多くの研究者によって適用されてきた一方、同時に補強・再検討も加えられ、現在に至る。だが、口誦形式理論については、未だ十分に理解されていないところも多々ある。例えば、口誦形式理論が如何なる語り物文芸に対しても同様に適用できるか、文字化される以前の語り物は如何に生成・伝播していくか、書記性(Literacy)が語り物の演唱、すなわち口頭性(Orality)に如何なる影響を与えるか、等の問題が挙げられよう。なお、多くの地域では語り物文芸が途絶したため、学術的興味関心が存在するものの、今後の研究は実現不可能な状態となっている。

こうした現状を承けて、KHALMIRZAEVA は、座頭による語り物文芸を口頭文化の一事例として、フォーミュラの習得・生成と、語り物の生成・継承・伝播の仕組み、及び語り物文芸の書記性(Literacy)と口頭性(Orality)等、語り物文芸の本質に関わる諸問題の解明を目指した。

研究の各段階で、兵藤裕己が九州地方の座頭から蒐集・記録した200本以上に及ぶ音声・映像資料を対象として、音声・映像資料を文字に起こしつつ、注や解説を施すことで研究データを作成した。そして、Albert Lord、John Miles Foley、荒木繁、安田宗生等の先行研究を踏まえ、各研究段階で必要とされる資料を随時調査・収集しつつ、データの分析・考察を行い、論文執筆

を進めてきた。

4. 研究成果

これまでの研究によって得られた成果は、以下 1～3 に詳細を示す通りである。

(1) 座頭のレパートリーにおける宗教テキストに関する研究

本研究では、座頭による宗教テキストの実態及び宗教活動と芸能活動との関係について考察を行った。具体的には、座頭による『ワタマシ』(演唱例:4種)『カマド祓い』(演唱例:2種)を分析した。これらの分析結果や座頭のインタビューを踏まえ、座頭のレパートリーにおける宗教テキストの実態について検証した。その結果、(1) 現在伝わる宗教テキストの詞章は、大きく相違すること、(2) 同一の語り手による宗教テキストの詞章は、意識的に固定化したものであること、(3) 詞章の異同は、語り手から語り手へと継承される際に発生すること、(4) 宗教テキストを暗記して再現する行為は、詞章を固定化する慣習を定着させ、芸能活動に影響を与えることが判明した。研究の本段階で得られた成果を取り纏め、2024年9月にルーマニア、ブカレストにて開催される国際学会で発表し、2024年度の*Global Perspectives on Japan*に掲載する予定である。

(2) 座頭のレパートリーにおける平家物に関する研究

本研究では、『一ノ谷』『小敦盛』に焦点を絞り、座頭のレパートリーにおける平家物について考察した。まず、九州地方の座頭による『一ノ谷』(演唱例:合計5種)、及び『小敦盛』(演唱例:合計3種)を分析し、伝承の輪郭を支える構成要素や定型場面・詞章が一致する箇所を定めた。次に、『平家物語』諸本(延慶本・源平盛衰記・長門本・四部合戦状本)を始め、その他の語り物ジャンルのテキスト(謡曲『敦盛』『生田敦盛』、幸若舞曲『敦盛』、古浄瑠璃『小敦盛』等)との比較考察を行った。これらの分析結果や先行研究を踏まえ、九州地方に伝わる『一ノ谷』『小敦盛』の特徴と、その他の語り物ジャンルとの関係、及び平家関連伝承の受容実態について芸能史論と物語論の観点から検証した。その結果、(1) 座頭のレパートリーにおける『一ノ谷』『小敦盛』は、本来、一ノ谷合戦から始まる一つの長い物語であったこと、(2) 座頭のレパートリーにおける『小敦盛』は、現存する語り物テキストの中でも、説教・古浄瑠璃系『小敦盛』に近い形を取っていること、(3) 双方の伝承は、各地に広く流布していた、より古い物語を共通の源流とするという結論に至った。研究の本段階で得られた成果を取り纏め、2021年8月に開催されたEAJS(ヨーロッパ日本研究協会)にて発表し、2024年度の*Global Perspectives on Japan*に掲載する予定である。

(3) 座頭のレパートリーにおける説経物に関する研究

本研究では、『俊徳丸』『小栗判官』を研究対象として取り上げ、座頭のレパートリーにおける『俊徳丸』『小栗判官』の特徴と、その他の語り物ジャンルとの関係について考察を行った。具体的には、まず、座頭のレパートリーにおける『俊徳丸』(演唱例:4種)『小栗判官』(演唱例:4種)を網羅的に分析し、伝承の定型的な場面・表現を特定した。次に、座頭のレパートリーにおける『俊徳丸』『小栗判官』をその他の語り物ジャンルのテキスト(謡曲『弱法師』説経『俊徳丸』『小栗判官』等)と比較することにより、それぞれのジャンルにおける『俊徳丸』『小栗判官』の伝統性及びオリジナリティーについて論じた。その結果、(1) 座頭のレパートリーにおける『俊徳丸』『小栗判官』の構成は、固定化しているものの、詞章は、語られる度に激しい異同を伴うこと、(2) フォーミュラ(定型句・常套句)が確認できること、(3) 座頭による『俊徳丸』『小栗判官』は、それぞれ説教・古浄瑠璃系『俊徳丸』『小栗判官』と共通の物語構成要素を持つこと、(4) 説教・古浄瑠璃系の伝承と異なり、残虐な場面を欠くことが明らかになった。また、座頭のレパートリーにおける『俊徳丸』『小栗判官』と説教・古浄瑠璃系の伝承との共通性について、それぞれの語り物ジャンルは各地に広く流布していた、より古い物語を共通の源流とし、物語展開・場面の描写における相違は、それぞれの語り物ジャンルの特徴によって生み出されたという可能性を提示した。研究の本段階で得られた成果を取り纏め、2023年度の日本アジア研究会、2022年度の北欧・日本韓国研究学会、2022年度のイギリス日本研究会、2023年度のヨーロッパ日本研究協会、2023年度の年次アジア研究会にて発表し、2023年度の『比較類型論研究のプリズムを通して、異なる文化、民族性、言語の相互理解』、2023年度の『岡山大学全学教育・学生支援機構教育研究紀要』に掲載し、また2024年度『岡山大学教育推進機構教育研究紀要』に掲載する予定である。

KHALMIRZAEVA が取り組んできた本研究は、日本における語り物ジャンルの実態・形成・歴史的展開を明確にするだけでなく、他地域の語り物研究に適用可能な法則・事例を提供し、口誦形式理論を補完・補正することで、国際口承文芸研究に貢献するものとなった。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計5件（うち査読付論文 4件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 2件）

1. 著者名 ハルミルザエヴァ サイダ	4. 巻 2(22)
2. 論文標題 話型<帰還した夫> - 日本の<アルボミシュ>の起源を巡って (訳)	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 比較類型論研究のプリズムを通して、異なる文化、民族性、言語の相互理解	6. 最初と最後の頁 214-221
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 ハルミルザエヴァ サイダ	4. 巻 7
2. 論文標題 Old Stories, Original Retellings: Domestic Conflicts and Family Relationships in the Blind Biwa Tradition of Kyushu	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 岡山大学全学教育・学生支援機構教育研究紀要	6. 最初と最後の頁 107-118
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 ハルミルザエヴァ サイダ	4. 巻 6
2. 論文標題 Narrative Development across Cultural and Historical Contexts: A Case Study of the Asian Versions of The Homecoming Husband	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 Global Perspectives on Japan	6. 最初と最後の頁 19-37
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 ハルミルザエヴァ サイダ	4. 巻 2
2. 論文標題 九州の盲人伝承者による伝統 - 過去と現在 (訳)	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 比較類型論研究のプリズムを通して、異なる文化、民族性、言語の相互理解	6. 最初と最後の頁 137-142
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 ハルミルザエヴァ サイダ	4. 巻 3
2. 論文標題 アジア大陸における百合若大臣 - <帰還した夫>の成立と歴史的展開を巡って	5. 発行年 2024年
3. 雑誌名 説話・伝承学	6. 最初と最後の頁 81-96
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計13件 (うち招待講演 0件 / うち国際学会 7件)

1. 発表者名 ハルミルザエヴァ サイダ
2. 発表標題 Old Stories, Original Retellings: The Heike-related Tales in the Repertory of the Blind Biwa Players of Kyushu
3. 学会等名 European Association for Japanese Studies (国際学会)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 ハルミルザエヴァ サイダ
2. 発表標題 Old Stories, Original Retellings: Domestic Conflicts and Family Relationships in the Mosobiwa Tradition of Kyushu
3. 学会等名 Annual Conference on Asian Studies (国際学会)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 ハルミルザエヴァ サイダ
2. 発表標題 帰還する夫と待つ妻の物語 - 日本の『アルポミシュ』の起源説を巡って -
3. 学会等名 国際日本学研究フォーラム・文明のシルクロード13 歴史・言語文化・政治・経済を巡って日本とウズベキスタンの共同戦略 (国際学会)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 ハルミルザエヴァ サイダ
2. 発表標題 Regional Tales in the Mosobiwa Tradition of Kyushu: on the Role and Function of Kikuchi Kuzure
3. 学会等名 The British Association for Japanese Studies
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 ハルミルザエヴァ サイダ
2. 発表標題 Narrative Development across Cultural and Historical Contexts: A Case Study of the Asian Versions of The Homecoming Husband
3. 学会等名 The Asian Studies Conference Japan (国際学会)
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 ハルミルザエヴァ サイダ
2. 発表標題 Old Tales, Original Retellings: the Japanese Legend of Resurrection and Revenge
3. 学会等名 Nordic Association for Japanese and Korean Studies
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 ハルミルザエヴァ サイダ
2. 発表標題 Traditional Formulas and Themes in the Tradition of Blind Biwa Players from Kyushu
3. 学会等名 European Association for Japanese Studies (国際学会)
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 ハルミルザエヴァ サイダ
2. 発表標題 『オデュッセイア』から『ザーヒル』まで - ペネロペイア像の歴史的展開を巡って -
3. 学会等名 日本比較文学会 第61回東京支部大会
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 ハルミルザエヴァ サイダ
2. 発表標題 アジアの「百合若大臣」 アジア大陸における 帰還した夫 の成立と歴史的展開を巡って
3. 学会等名 説話・伝承学会
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 ハルミルザエヴァ サイダ
2. 発表標題 Regional Tales in the Mosobiwa Tradition of Kyushu: Facts and Fiction in Kikuchi Kuzure and Miyako Gassen Chikushi Kudari
3. 学会等名 Annual Conference on Asian Studies (国際学会)
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 ハルミルザエヴァ サイダ
2. 発表標題 インドやその周辺地域の<百合若大臣> 類話の起源をめぐる一試論
3. 学会等名 説話・伝承学会
4. 発表年 2024年

1. 発表者名 ハルミルザエヴァ サイダ
2. 発表標題 アジア大陸のシャーマン - バクシの過去と現在、そして未来 -
3. 学会等名 アジア民族文化学会
4. 発表年 2024年

1. 発表者名 ハルミルザエヴァ サイダ
2. 発表標題 Storytelling and the Cross-Cultural Transmission: A Case Study of the tale-type The Homecoming Husband
3. 学会等名 The Society for Multi-Ethnic Studies: Europe and the Americas (国際学会)
4. 発表年 2024年

〔図書〕 計1件

1. 著者名 ハルミルザエヴァ サイダ (担当:分担執筆, 範囲:「日本と中央アジアの伝承の類似」)	4. 発行年 2023年
2. 出版社 武蔵野書院	5. 総ページ数 128
3. 書名 文学交流入門	

〔産業財産権〕

〔その他〕

なし

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------